

修体制の充実によって職員の資質を向上させることももちろん重要だが、異動が多いことや業務の多忙さから研修が実施しにくいなどの現状もある。まずは、誰が読んでもわかりやすい表現、用語で作成することが大切である。

また、いつどのように動くか(時間的なもの)、そのとき何をチェックすればよいのかという2次元の対応表があるとよい。なお、職員が少なく全員出払っていたり、過疎地の家庭で遠すぎて頻りに様子をうかがうことが難しいなど、地方ならではの課題もいくつかあるので考慮する必要がある。

具体的には、オンタリオモデルを基盤として、3部から構成されるものが望ましい。すなわち、①○をつけたり、点数をつけたりする形で記入が即座にできる「チェックリスト式」のもの、②より細かい情報を書き込む「記述式」のもの、③解説、の3部である。解説は、一ヶ所の児童相談所に1～2冊あれば十分だが、チェックリストや情報の記述用紙は、ケースによって、あるいはその状況変化に応じて、その都度作成が必要になり、複数必要になるものである。そのためには、①②③が1冊になっていない方がよい。

また、アセスメントに関する情報を点数化したりグラフ化する等、簡素化し、視覚的に即座に把握できるようにするとよい。神奈川では、一つ一つのケースについてファイルを作成しているため、そのファイルに保存する際に、便利なものだとよい。また、解説に関してはチェックリスト等記入の際の手順が細かく記された解説書が必要である。特にリスクアセスメントに関する説明や、調査、介入、援助していく際の基準を明確にすべきである。現在は、危険性だけではなく親・子の状況を見て判断しており、職員によっても児童相談所によってもものさしがそれぞれ異なる。同じ問題でも、問題視する児相もあればしない児相もありうる。それらにどのように配慮で

きるかが課題である。

本報告は、以下のメンバーによって実施された。

中谷茂一(東海大学)  
谷口和加子(日本子ども家庭総合研究所)  
澁谷昌史(上智社会福祉専門学校)  
荒川裕子(日本子ども家庭総合研究所)  
田中島 晁子(東京都児童相談センター)  
青葉紘宇(東京都足立児童相談所)  
農野寛治(神戸常盤短期大学)  
栗原直樹(埼玉県中央児童相談所)  
浜田尚樹(神奈川県中央児童相談所)  
津崎哲朗(大阪市中央児童相談所)  
才村真理(大阪府東大阪子ども家庭センター)  
合田 誠(四條畷学園女子短期大学)  
辰巳 隆(聖和大学)  
垣内陽子(大阪市中央児童相談所)  
曾田俊子(大阪市中央児童相談所)  
石谷英治(大阪府岸和田子ども家庭センター)